

『7th World University Match Racing Championship』

出場報告書



2014年7月30日

日本代表選抜チーム

市川 航平
中山 遼平
加藤 文弥
小池 俊輝

JSAF キールボート強化委員会

『7th World University Match Racing Championship』出場報告

JSAFキールボート強化委員会

中山遼平 加藤文弥

2014年6月28日(土)～7月5日(土)までイタリア・トレンティーノ州のレドロ湖にて開催された『第7回ワールド・ユニバーシティ・マッチレーシング・チャンピオンシップ』に、J/24月光チームの若手メンバーを中心に日本代表として参加しましたので、以下の通りご報告します。

記

1. 日程

6月 27日(金)イタリア・ヴェローナ空港到着
28日(土)受付／体重測定、事前練習
29日(日)(受付／体重測定、)事前練習、
全体ミーティング、オープニングセレモニー
30日(月)ステージ1 ラウンドロビン

7月 1日(火) ステージ1 ラウンドロビン
2日(水) ステージ1 ラウンドロビン、ステージ2ラウンドロビン
3日(木) ステージ2 ラウンドロビン、クウォーターファイナル
4日(金) セミファイナル、9～19位順位決定戦
5日(土) ファイナル、ペティットファイナル、
5～8位順位決定戦、アワードィングセレモニー
6日(日) ヴェローナ空港出発

* レース期間中の夕方はアンパイアとのデイブリーフィングが行われた。

2. 日本チームメンバー

日本チームは以下の4名で構成された。

市川航平(スキッパー、早稲田大学)

中山遼平(トリマー、東京大学)

加藤文弥(バウマン、早稲田大学)

小池俊輝(ピット・メイントリマー、首都大学東京)

3. 出場国(オープン、女子クラスともに2チーム/国までエントリー可能)

OPEN CATEGORY

COUNTRY	NAME	RANKING
AUS 1	GILMOUR Samuel	24
POL	SADOWSKI Tymon	70
FIN	RÖNNBERG Markus	75
GER	MAIER-RING Adrian	78
GBR 1	WILKINSON Nicholas	94
TUR	TUMSEN Yasar KARAYAN Sahan	106
JPN	ICHIKAWA Kohei	114
SIN 1	LIU Justin	130
ITA 1	GALATI Valerio	136
FRA	QUIROGA Pierre	138
AUS 2	GRIFFIN Jay	176
CAN 1	GARDNER Landon	183
GBR 2	MILLER Connor	229
SIN 2	LEE Sean	305
BRA	GROCHTMANN Philip	376
RUS	KATAEV Sergei	410
ITA 2	CAVALLARI Sandro	434
USA	SNOW Nevin	844

CAN 2	HEARST Jason	958
-------	--------------	-----

WOMEN CATEGORY

COUNTRY	NAME	RANKING	ISAF
SIN	LIM Denise	14	SINDL3
FRA	COURTOIS Pauline	28	FRAPC14
AUS 1	MCCALL Tara	49	AUSTM17
GBR	VOSE Annabel	50	GBRAV3
AUS 2	STROILOVSKY Kathleen	79	AUSKS7
BRA 1	PONCIONI MOTTA Juliana	84	BRAJP3
ITA	WETZL Federica	-	?
BRA 2	CARDIA JARDIM Marina	-	?

4. 競技艇

オープンクラスはJ/22を使用し、競技艇のセールはメインセール、ジブセール、スピinnネーカー各1枚によって構成される。

女子クラスはUFO22を使用し、競技艇のセールはメインセール、ジブセール、ジェネカー各1枚によって構成される。

5. レース運営

- 海上のレース運営についてはハーバーマスターを中心にレースを進行し、地元の運営スタッフが各運営ボートに配置され、風が弱く振れ幅も大きかったが円滑にレースが実施され1日約40マッチを消化することが出来た。
- フィニッシュラインが、スタートラインと別に形成されていたため、進行中のレースのフィニッシュを待つことなく次のマッチを進めていた。
- 風上にあらかじめ4つマークを設置していたので、コース変更におけるマークの打ち直しがないため、マーク変更における待機時間がなかった。
- 運営ボートは本部船、フィニッシュ本船、マークボート2艇、選手の乗り換えボートが2艇、コミッティーボート1艇、ジュリーボート4艇の計11艇で行われた。

6. コース等

コースはソーセージコース(スタート・上・下・上・オフセットマーク・フィニッシュ)で、1フライトの時間がおよそ25分程度で完了するレグの長さで設定された。

風上にはマークを4つ定め、風に応じてスムーズにコース変更できるようにしていた。フィニッシュラインは別途フィニッシュ本船とフィニッシュアウターで形成されていたため、異なるマッチのフィニッシュとスタートが入り乱れることなく円滑にレース進行されていた。

7. 規則

RRSの付則Cを含み規則に準じて行われた。

クラスルールは適用されず、帆走指示書にて記載された競技艇取り扱い規則が適用された。

8. レース結果

最終成績は以下の通りであった。

【OPEN CATEGORY】

優勝	USA	SNOW
2 位	AUS1	GILMOUR
3 位	FRA	QUIROGA
4 位	JPN	ICHIKAWA
5 位	SIN2	LEE
6 位	ITA	GALATI
7 位	SIN1	LIU
8 位	GBR2	MILLER
9 位	TUR	KARAHAN
10 位	POL	SADOWSKI
11 位	AUS2	GRIFFIN
12 位	FIN	RONNBERG
13 位	CAN1	GARDNER
14 位	RUS	KATAEV
15 位	GBR1	WILKINSON
16 位	GER	MAIER
17 位	BRA	GROCHTMANN
18 位	ITA2	CAVALLARI
19 位	CAN2	HEARST

【WOMEN CATEGORY】

優勝	GBR	VOSE
2 位	FRA	COURTOIS
3 位	BRA1	PONCIONI MOTA
4 位	SIN1	LIM
5 位	ITA	WETZL
6 位	AUS1	MCCALL
7 位	AUS2	STROILOVSKI
8 位	BRA2	CARDIA JARDIM

9. 参加費用

大会参加費は、艇のチャーター料金、宿泊、食事、現地での交通費を含めて、1人1日60ユーロであった。日本チームの場合、4名×9日で2,160ユーロを現地受付時に支払った(参加費のうち4分の1は事前に送金)。

10. その他

[マリーナ、宿舎の環境]

マリーナは1戸建ての小さなクラブハウスと仮設の休憩場があり、船はすべて1本の桟橋に係留した。小さなハーバーではあったが、ハーバー建築のコンセプトとして「景観を壊さずに自然にとけこんだハーバー」というものがあり、本当に自然にとけこんだ綺麗なマリーナであった。

大会期間中、マリーナ周辺の宿舎にチームごとに分散して宿泊し、まるで選手村のようであった。日本チームの宿舎は個人経営の4F建てホテルで、宿舎からマリーナまでは徒歩15分程度であった。朝夕食は別のレストランで用意されており、選手全員が集まり食事を取った。他国のチームとは宿舎も近く、食事も一緒だったためコミュニケーションをとることができた。

[各国のチーム状況]

USAを始めいくつかの国では国内予選があり、勝ち抜いたチームが代表として本大会に出場していた。またUSA、AUS、FRA、SIG、BRAなど多くの国はコーチやマネージャーが帯同していた。レースの分析や戦略のミーティング、その他広報活動も行っていた。日本チームはコーチも監督もなく選手だけであったが、こうした遠征にはコーチやマネージャーが帯同することが望ましいと感じた。

特にシンガポールチームはスタッフ陣が多く、監督1名、コーチ2名、マネージャー1名と選手のサポート体制に力を入れていた。コーチングだけでなく、活動報告を隨時監督とマネージャーが行い、Facebookを活用してPRを含む報告を行っていた。また、海上でのプレスボートに乗り写真も多く撮っており、大会の公式写真に使われたり、各国の選手達から写真をもらいたいと言われたり多くの反響を得ていた。最終的には大会のホームページと同等、もしくはそれ以上のアクセスを記録していた。

[日本代表としての参戦]

今回、私達が日本代表として大会に出場するにあたり、JSFAやJYMAから様々な支援を受けて出場が叶った。特に、私達だけでは大会参加費やダメージデポジットを含む遠征費用を捻出することは困難であり、今大会へのチャレンジを諦めかけていたところ、支援の話を頂き初めて出場するに到った。

これまで今回のような大会に出場する権利はあってもチャレンジできる後ろ盾がなく、チャレンジできないという現実があり、特に規模の小さいセーリング競技ではそれが顕著であった。しかし、私達が日本代表として世界一になるべく挑戦することに對して快く認めてくださり、支援して頂いたJSFAやJYMAのおかげで出場することができた。

日本代表として最後はメダルまであと一步というところまで来たが、力及ばず4位という結果に終わり大変悔しい思いであった。メダルを持って帰国し、応援して頂いた多くの方に喜んで頂きたかったが、叶わない夢となってしまった。日本代表としてメダルを争うレースでは、結果としてプレッシャー負けてしまい、思うようなレースができず自滅してしまったと自省している。

しかし今回、初めて日本代表として出場する機会を頂いたことで、普通では味わえない緊張感と勝利に対する喜び、貪欲さ

を感じることができた。この悔しい経験を今回で終わらせるのではなく、自分達を始め、後輩にも伝えていき、今後より良い結果を残せるよう私達の感じことや経験を伝えていきたい。

[2016年のユニバーシアード大会への挑戦]

今回、私たちは4位という結果に終わってしまいました。大会を終えて、「よくやった」、「頑張ったな！」、「すごいことだよ」とたくさんの労いの言葉を頂きました。確かに今までの成績をみれば、今回の結果は良かったのかもしれません、私たちの中で誰一人満足している選手はいませんでした。

世界大会でメダルまであと一歩の所でとれなかった経験はしたことがなく、自分達の力不足をとても後悔しました。しかし、その反面自分達の力が世界でも通用することに気づくことができました。ですが、まだまだメダル、優勝を狙うには一歩力が足りないのも事実でした。

次回のユニバーシアード・マッチレース競技は2016年9月にオーストラリア・パースで行なわれます。今回出場した4人全員とも出場資格(大学卒業後2年以内かつ28歳以下)を満たしており、次回大会も挑戦することができます。艇種はファンデーション36と5人乗り、今年1月に出場した「Warren Jones International Youth Regatta」と同じ艇で、日本人にとってはハードな船になりますが、2年間準備とトレーニングを行えば日本人でも十分通用する技術と戦術を身につけることができると思っています。次回大会は私達にとって最後のチャンスになりますが、2014年の悔しさをバネに2016年に向けて成長し、日本代表として相応しいメダルを持ち帰りたいと思っています。今大会の経験を糧に更なる挑戦をして行きます。



大会開催地となったレドロ湖。南アルプスでも有数の景勝地であった。



日本チーム(左からバウマン加藤、ピット小池、トリマー中山、ヘルム市川)





オープン/女子クラス合わせて、本大会には14カ国27チームが参加した。

【遠征収支】

ユニバーシアード遠征決算				
収入				
項目	単価	個数	金額	備考
個人負担	50,000	4	200,000	
JSAFご支援	351,592	1	351,592	大会エントリー及び保険(予定)
JYMAご支援	200,000	1	200,000	
ラル・金子さんご支援	30,000	1	30,000	
ボロシャツ販売利益	275,577	1	275,577	月光・中澤さんご支援により作成
合計			1,057,169	
支出				
項目	単価	個数	金額	備考
大会エントリー	308,102	1	308,102	60€ × 9泊(6/27~7/5) × 4名 = 2160€ (換金時1€=142.64円)。艇チャーター、宿泊、食事、現地交通費込み
デポジット	0	1	0	無事故のためノーデポジット。最大800ユーロ
航空券	155,790	2	311,580	中山、加藤
航空券	151,920	2	303,840	市川、小池
現地お土産	18,874	1	18,874	羽田購入
日本お土産	11,325	1	11,325	79.4€
タクシー	28,528	1	28,528	200€。復路(レドロ湖～ヴェローナ空港)
保険	43,490	1	43,490	大会規定を満たす第三者賠償責任を含む保険に各自加入
備品、工具類	8,904	1	8,904	
WiFiルーターレンタル	20,852	1	20,852	
合計			1,055,495	
収支			1,674	円

大学マッチ・ユニバーシアードに出場して

レポート／スキッパー 市川航平

6月28日～7月5日、北イタリアのトレント州レドロ湖で「大学マッチレース世界選手権・ユニバーシアード」が開催され、日本代表チームとして、月光ボイズの4名（市川航平、加藤文弥、中山遼平、小池俊輝）がワールドチャンピオンの座を賭けて、世界の強豪と戦ってきました。



月光ボイズチームメンバー。加藤文弥（バウ）、市川航平（スキッパー）、小池俊輝（ピット）、中山遼平（トリマー）

僕らの活動を日本から応援して下さった皆様と、これから日本のセーリング界を支えるユースセーラーの皆さんに、詳細な報告と僕らが世界と戦ってきて感じたことをお伝えしたいと思います。

17歳～28歳を対象にしたユースの大会とはいえ、参加選手の戦歴を見れば一流のセーラーが多く、どの国も自国内外から雇った専属コーチや、チームをまとめる監督などが帯同しており、『ユース世代のオリンピック』とも称されるこの大会にかける意気込みは各国並々ならぬ思いがあることが開催前の準備期間から伝わりました。

オープンクラス（男子or男女ミックス）は19チーム、女子クラスも8チームあり、世界各国から100名以上のセーラーが集まり大会は開催されました。

最終結果は以下の通りです。

OPEN CATEGORY

- 1 USA SNOW Nevin
- 2 AUS GILMOUR Samuel
- 3 FRA QUIROGA Pierre
- 4 JPN ICHIKAWA Kohei**
- 5 SIN LEE Sean
- 6 ITA GARATI Valerio
- 7 SIN LIU Justin
- 8 GBR MILLER Connor
- 9 TUR KARAHAN Canberk
- 10 POL SADOWSKI Tymon
- 11 AUS GRIFFIN Jay
- 12 FIN RONNBERG Markus
- 13 CAN GARDNER Landon
- 14 RUS KATAEV Sergei
- 15 GBR WILKINSON Nicholas
- 16 GER MAIER-RING Adrian
- 17 BRA GROCHTMANN Philip
- 18 ITA CAVALLARI Sandro
- 19 CAN HEARST Jason



表彰台を逃し悔しい思いをしました。

僕ら日本チームは、予選ラウンドロビン(2グループに分かれ総当たり戦)を7勝1敗のグループ内1位で通過することができ、ラウンド2を飛ばしてクウォーターファイナル(ベスト8、2勝先取り)へと進出しました。

クウォーターファイナルでは、イギリスチームに2勝1敗で辛くも勝利し、勝てば銀メダル以上が確定するセミファイナル(ベスト4)へと駒を進めましたが、ここで優勝チームのアメリカに敗れ、続く3位決定戦でもフランスチームに負けてしまい、あと一步のところで世界大会でのメダルと表彰台を逃す、悔しい結果となりました。

閉会のセレモニーで、表彰台に上ることの許された他国の選手達、掲揚されていく国旗を見て、あんなに悔しい思いをしたのは未だにメンバー全員忘れてはいないでしょう。



左からオーストラリア、アメリカ、フランス。オープンクラス上位3チーム

◎必要不可欠だと感じた英語での主張

国外のマッチレースの大会は、シンガポール、オーストラリアに続きこれで3度目ですが、遠征するたびに痛感することがいくつかあります。

まず1つ目は、言葉の壁、『英語の会話能力』です。

マッチレースにおいて、英語で自己表現や自己主張をすることは勝つために非常に重要な能力の1つで、それはマッチレースの特性上、スタート4分前のエントリーからフィニッシュまでの間、相手とぶつかるか避けるかのギリギリの攻防が頻繁に起きるため、否が応でも相手とケースが起きたり、Y旗(プロテスト)と共にアンパイアへ訴えかけたり、白熱すれば過激なスラングまで行き交ったりもします。

僕も大会前にはルールブックとケースブック、そして海外のマッチレースのオンボード映像の音声から、多くのケースと、そのケースで交わされるであろう英語を想定し、すぐに発言できるように可能な限り全て頭に入れてから戦いに臨むようにしています。

自分の主張が正しかろうが、間違ってペナルティーを取られてしまおうが、フィニッシュ直後や毎日レース後に行われるディブリーフィングでは、アンパイア陣にケースの詳細とジャッジの理由を選手全員が事細かに熱く質問し、全選手がそれに耳を傾けます。

それは、各アンパイアのジャッジの特徴や判断基準のボーダーラインを把握するためであったり、アンパイア陣に自分のルール認識力の高さを証明するためであったり、理由は様々ですが、選手皆が陸上のブリーフィングですらレース同様に真剣に取り組むのは、それが勝敗の行方に深く繋がるものだと認識しているからです。

そしてこの英語というツールは、マッチレースに限らず、フリートレースでも同様に重要です。

海外のトップ選手やコーチなどから、最新のセーリングテクニックを学ぶためには、彼らとの密なコミュニケーションが必要不可欠だし、オリンピックのメダルレースなどでは、メダルをかけてのスタート前からの激しい1対1での攻防は度々見受けられます。

これまで海外選手からのプロテストや審問で日本人選手が敗ってきた数を考えると、英語という言葉の修得が、セーリング競技での成功に繋がることは明白で、そしてそれは昨今の日本人選手の大きな課題の1つだと感じます。



海外のレースはいつでもお祭り騒ぎ。閉会式前から盛り上がります。写真中央を陣取るは加藤

◎思い知られた経験値と体格の差

2つ目は、『セーリング経験の幅の広さ』と、『体格の重要性の認知度』です。

日本でも世界でも、小～中学生ではOPを経験し、高校では420などを学べるため大きな差はありません。しかし個人でセーリングを続ける選手を除き、多くの日本の大学生は部活動でインカレ優勝を目指す4年間の中で、470もしくはスナイプのどちらかしか乗らない選手が大半です。また体格の重要性を気付くには、それらの艇は少し小さ過ぎるとも思います。

海外でも420から470へ移ったり、長い間同じシングルハンダーに乗る選手も少なからずいますが、それはその国内で限られた数チームのみであり、日本で僕らが国内のみで、また環境次第ではコーチ不在や毎年ペアが変わるなどの問題を抱える一方、彼らは国の支援と専属のコーチの下、若くして多くの世界の大会を経験して行きます。

今大会で採用された艇はJ/22でしたが、僕らを含め、集まった同世代の海外の選手は皆、普段は別の艇で活動しています。大学生にもなると、海外の選手は様々な艇でのセーリングを積極的に行っています。

470やスナイプを乗る選手もありますが、それ1艇種のみという選手はほとんどいなく、これまでの大会で知り合ったオーストラリアやニュージーランド、ヨーロッパなどのセーリング強国の中の選手の多くが、キールボートやメルジェスの他、49erや18フッター、モス、カイトセーリングなどをマッチレースと並行して行っており、さらにそういった他の種目でもISAFワールドなどに出場していました、ナショナルチームになってしまったりしているというから驚きです。

今大会優勝のアメリカチームのスキッパーも、一時はマッチレースの世界ランクで27位まで上りつめ、AC45を使ったユースアメリカズカップなどマルチハルのボートも経験しています。

ユース世代の海外選手の多くが、様々なキールボートやハイスピードボートに積極的に乗り、その中でスピード感覚やセーリング技術、また強固な身体をつくることの重要性を深く理解しています。

マッチレースのユース大会はそういった多種多様な選手が集まる場であり、未来のオリンピックメダリストやスピードボートの一流選手、アメリカズカップの選手へと上り詰める選手と知り合い、1対1で戦い合える最高の舞台が広がっています。



◎ディンギーからキールボートへ

大学生セーラーが部活引退と共にセーリングを辞めてしまうのは簡単ですが、その先に広がる大きな世界を覗いてみてからでも、その判断は遅くはないでしょう。

日本人が、ワールドマッチレーシングツアーやアメリカズカップ、ボルボオーシャンレースなどの世界の超一流の舞台に参戦し、活躍するような時代が来るためには、ユースセーラーの僕らが世界に向けて一歩を踏み出し、次世代へバトンタッチをしながら、その一歩を長年継続していくしかないと思います。

そして、今僕らが挑戦しているマッチレースやキールボートといった世界は、1人では出来ない、多くの仲間が必要なヨットレースです。

僕らと一緒に、世界で活躍するマッチレーサー、キールボートセーラーを目指しましょう！ 2年後のユニバーシアードはオーストラリア西海岸のパースで行われます。

艇種はFoundation36(36フィート、ワールドマッチレーシングツアー採用艇種)で5人乗り。

僕ら月光ボーイズは今年2月に同艇種同海上で行われた、ウォーレンジョーンズ・インターナショナルユースマッチレーシングに、日本で初めて日本人のみの6人チームで参戦しましたが、毎日吹く20ノット以上の強風、メインシートやヘッドセール、スピンドルの重さは想像を絶するもので、タックやジャイブすら満足にいかない苦しい戦いでした。

それを5人で行うとなると、しっかりトレーニングを積まないとかなり日本人には難しいレースになることが予想されます。

ユニバーシアードは大学、もしくは大学院卒業後2年以内なら参戦可能で、今回参加した4名とも参加権利がありますが、先のことはまだ分かりません。

まずは来年2月に行われるウォーレンジョーンズ・インターナショナルユースマッチレーシングに再挑戦し、これまでの成果を活かして、世界の選手達と対等に戦ってきたいと思います。

また、今年9月にはアメリカのニューポートで行われるJ/24のワールドにも、市川がタクティシャンとして、中山がピットマンとして、月光チームの一員として参戦してきます。

そして、今回メダリストになれなかった悔しさを活かして、これかもセーリングに真摯に向き合い、挑戦を続けていきますので、今後も応援よろしくお願いします。この度は、僕らを応援していただき、本当にありがとうございました。



アメリカチームのクルーと。アメリカチームのトリマーは女の子でした。すごい!



オーストラリアチームと。写真中央のRemyはAUSの一流マッチレーサーで現シンガポールチームのコーチ。中央右が、ピーターギルモア氏の息子(次男)のサム。彼とは再びパースで戦うことを約束しました。

第7回ワールド・ユニバーシティ・マッチレーシング・チャンピオンシップ

第7回ワールド・ユニバーシティ・マッチレーシング・チャンピオンシップが、6月29日～7月5日に北イタリアのLAGO DI LEDROで開催され、日本チームは世界4位に入賞した。

同大会は4人乗りのヨットを使って行われるマッチレースで、14カ国から19チームが参加した。参加チームはすべてが大学生（含む大学院生）で構成されるチーム。女子部門もあり、ここには6カ国8チームが参加したが日本からの参加はなかった。

レースの模様は、日本チームが予選レース8勝1敗のトップ成績で1位通過した。その後、準々決勝でイギリスに2勝1敗で勝ち、準決勝に進出。7月4日に行われた準決勝戦でアメリカチームと対戦したものの、0勝2敗で負け、3位決定戦に進出することになった。翌5日の3位決定戦ではフランスチームと対戦したが、0勝2敗で敗れ、最終結果は世界4位となった。



日本チームのメンバー。左から加藤文弥（早稲田大学）、小池俊輝（首都大学東京）、中山遼平（東京大学大学院）、市川航平（早稲田大学大学院）

アナと雪の女王50万枚レンタル史上最速突破 販売17万枚突破し過去最高に

ゲオホールディングス（代表取締役社長 遠藤結哉）の子会社ゲオ（代表取締役社長 吉川恭史）が7月16日から開始した「アナと雪の女王」のDVD並びにブルーレイディスクのレンタル視聴数が22日までに50万枚を突破、販売数も17万枚を超え、同店グループ史上過去最速のペースとなった。

作品の話題性と夏休みの需要を見込み、在庫数も過去最大であった「ワイルド・スピード EURO MISSION」の約2倍となる15万本を用意したが、各店での好調なレンタル需要が進み在庫切れが多くの店で発生、現在でもレンタル待ちの顧客がいる状況だという。ゲオによれば今後12か月のレンタル需要は350万枚と予想され、

これまでの同店グループの最高であった「ティッド」の160万レンタルを大幅に更新する見込み。一方、販売実績の17万枚突破は、2010年5月に発売されたゲオの初動（一週間）販売記録である「エヴァンゲリヲン新劇場版：破EVANGELION, 2.22」の約9倍の売れ行きで、最終的には記録を更新する過去最高の25万枚を見込んでいる。顧客層にも変化が見られた。夏休みに入り最初の週末となった19日（土）には子供連れの父親の姿が多く見られ、また、子供や女性だけではなく20代～30代の男性レンタル客の姿も多く見られ、ゲオでは男性の「おひとり様」マーケットの需要創出効果もあると分析している。

「大阪府外国人留学生対象有給 インターンシップ事業」受託

ナジック学生情報センターグループのナジック・アイ・サポートは、大阪府と公益財団法人大阪府国際交流財団が共同で実施する「外国人材活用システム構築事業」における「外国人留学生対象有給インターンシップ事業」を受託した。これは大阪府在住・在学で、日本企業への就職を目指す留学生を対象に実施するもので、当該業務に係ることで一定の報酬を得て、責任を持った業務体験を実施する有給の企業インターンシップ事業。

この事業は、昨年度に引き続いだ同社が受託、インターンシップ先10社で20人の留学生の就業を予定している。世界から優れた人材を呼び込み、大阪の国際競争力強化を目指す大阪府国際化戦略実行委員会による外国人材活用システム構築事業の一環として、地元企業への就職や就業が円滑に進むよう、就職に必要な意識の醸成と日本の企業文化やビジネス慣行への理解促進を目指す取組み。同社が事前に実施する研修、面談を終えた留学生が、一般労働者派遣のスキームのもとで企業にて100時間程度の就労を体験する。

同グループでは、2006より学生就業体験事業「ワークプレイスメント（有給インターンシップ）」を推進している。これは全国の大学や地域の産学官連携組織と提携し、地域の産業界のニーズに基づき留学生を含めた学生と地域の優良中堅・中小企業を結び付ける活動を有給インターンシップを通じて展開しているが今回の事業もこの一環という。同グループではこれまでの実績から獲得した知見を活かし、これからも地域活性化に貢献していきたいと意気込む。ナジック・アイ・サポート
<http://www.nasic-is.co.jp/>